

# 白木地区70年の記録 「白木のあゆみ」に原子力歴史構築賞

原子力立地地域の住民として  
初めての受賞

今年（2021年）3月17日、敦賀市白木地区の橋本昭三さんが約70年間にわたって原子力立地地域の記録を綴った墨書「白木のあゆみ」等の資料が一般社団法人日本原子力学会の原子力歴史構築賞を受賞しました。

原子力歴史構築賞は、我が国における原子力平和利用の進展と定着に貢献した施設や実績、資料を顕彰することを目的に学会の創立50周年を記念して平成20年度に新設されました。橋本さんは、「過去に技術者の受賞はありませんが、地域住民からの受賞は初と聞いています。私のような者が賞をいた



橋本 昭三さん(92)

「もんじゅ」誘致当時を含め、通算15回・年区長を務める。敦賀市議会議員(5期)、敦賀市議会議長も務め、ふるさとへの思いは人一倍強い。



3月19日に敦賀市役所  
で市長から贈呈され  
表彰盾。地域住民が  
受賞するのは初の  
快挙。

だけるとは夢にも思わなかった。敦賀市をはじめとする関係者の皆様にお礼申し上げたい」と喜びを語りました。

## 「もんじゅ」建設の詳細も克明に

橋本さんが「白木のあゆみ」を書き始めたのは昭和25年（1950年）。集落の会議で江戸時代に敦賀半島のどのが議題に上がった際、昔の記録がほとんど残っていないことがわかり、「後世のため、村の記録を残そう」と一念発起され、20歳の元日に執筆をスタートしました。当初、周囲の目は

冷やかだったそうですが、「負けずに夜中に隠れて書き続けました」と当時を振り返ります。必死の思いで記録した内容は、集落で起こった出来事、敦賀半島の縄文時代からの歴史、漁業の様子など多岐にわたります。「もんじゅ」をはじめとす

る原子力施設の建設も、重大な出来事として書き残しています。外部の方のいろいろな意見、橋本さん自身の考えを詳細に記録するとともに、当時の新聞記事を引用するなど事実関係を整理され、道路や漁港が整備された経緯など原子力施設立地に伴う地域の変遷も克明に記しています。

原子力立地地域の約70年にもおよぶ歴史が記された文書は他に類がなく、「白木のあゆみ」は貴重な資料であると高く評価され、今回の受賞につながりました。

## 命ある限り書き続けたい

1日の平均執筆枚数は3〜5枚、書けない日もボールペンでメモを残し、後日、筆で清書しています。平成30年（2018年）には、当初からの目標だった通算5万枚を達成しました。「昔は

白木から敦賀（市街地）まで五里と言われていたので、五里分は書くことと書いてやってみると、思ったより楽に書ける」との言葉が示す通り、



「後世に役立ててもらえれば」と、敦賀市立博物館に寄贈された5万枚の墨書。【平成30年(2018年)11月9日】

5万枚を横に並べると、その長さは五里（約20㎞）となります。橋本さんはこれを一つの区切りとし、5万枚の墨書を敦賀市立博物館に寄贈しました。次の目標である6万枚も今秋には達成予定だと話します。

書き続ける原動力は、「ふるさとを愛する気持ち」と力を込めます。「もんじゅ」に対しても「白木という村が残れたのも「もんじゅ」が来てくれたおかげ。感謝している。廃炉にはなつたが、安全第一に作業を進め、これからも頑張っていたきたい」と期待を寄せています。

「命ある限り書き続けたい。100年書き続けること」という橋本さん。今日もふるさとへの思いを込めて筆を取ります。

●この記事に関するお問い合わせ

日本原子力研究開発機構 敦賀事業本部  
TEL 0770(23)3021